

高次脳機能障害のある方の社会参加の場と、障害への理解の広がりを

〜久里浜障害者支援センターゆんるりの取り組みから（横須賀市）

これまで本連載では、家族構成の変化を背景に、さまざまな福祉的課題を抱える本人と家族をどのように支援していくか、また、住むべき家を失い、家族や地域と疎遠になりがちな方々などの社会的ケアについて取り上げてきました。

今号は、久里浜障害者支援センターゆんるり（以下、「ゆんるり」）の取り組みから、脳外傷性損傷や脳血管性障害の後遺症による高次脳機能障害で、さまざまな生活課題を抱える本人やその家族の方々を、支えていくために何が必要かを考えます。

分りにくい障害、生活に大きな影響も

交通事故等による脳外傷や、脳血管障害の後遺症などにより、新しいことが覚えられない「記憶障害」、気が散りやすく、同じ間違いを繰り返すなどの「注意障害」、間違えた時の修正や計画の変更ができない「遂行機能障害」、このほか、言いたい言葉が言えない・出てこないことや、他人の話が理解できない、意欲の低下や情動の障害といった症状などが見られる「高次脳機能障害」。見た目では分かりにくく、症状がさまざまな形で表れてきます。

センター長の水村広貴さんは、

「作業工程や人の名前が覚えられない、怒りっぽくなったなど、周囲が、本人の受傷後の変化に驚き、関わることも苦慮します。しかしながら、退院したことで病気が完治したと思ひ、どのような症状が出ているか自分自身で認識する『病識』の持ちにくさが、障害の大きな特徴」と話します。

福祉サービスを必要とした場合でも、本人は、これまでの生活から、利用すること自体に抵抗感を感じることもしばしばあります。

そのため、本人の生活全般を家族のみで支えることとなり家族の生活は一変してしまいます。

家族の不安は、家計にも及びます。平成十八年の東京都高次脳機

能障害実態調査（以下、「調査」）によると、家庭の主たる生計者が本人である場合が、四十三・三%に上り、受傷により家庭の経済基盤が不安定となります。退院に際し、家族は、本人が掛けていた民間保険や障害年金の受給など、各種手続きに奔走します。そうした作業で家族が持つ精神的疲労を支えるために、ゆんるりでは、各種

手続きに必要な書類作成の手伝いや、手続きを行う窓口への付き添い、助言なども行っています。

相談員の千葉仁さんは、「家族は、病院や行政から情報を得られなくても、まず何をすべきか、見えにくく情報の整理が、家族にとって必要となります。さらに、本人

の受傷後の変化に戸惑い、障害への正しい理解を持つことが難しくなるため、相談できる支援者が必要」と言います。

不足する社会参加の場所

また、調査からは、約四割の方が「社会参加の場がない」状況であることが明らかとなっており、あることが明らかとなっており、障害のある方々の多くは既存の作業所等を通じて、社会参加を図りますが、障害の特性から利用に合わないことも少なくありません。

ゆんるりでは、高次脳機能障害のある方を対象とした日中活動の場として「おにぎりカフェゆんるり」を開設し、登録利用者十名、本人の状況に合わせ活動日には、



「おにぎりカフェゆんるり」の店頭。ランチは500円で提供している